園のくらしを育む7

日本の保育文化（1）－運動会－

秋田喜代美

1　運動会という行事文化

九月の終わりから十月にかけては、どの園でも運動会が行われる季節です。欧米の保育研究者に日本の運動会のＤＶＤを見せると、必ず興味をもたれます。それはある意味で、園児と保護者が一体になって行う特別な行事という文化的儀式であり、マラソン大会やバザー等とはまた違った働きをもっているからのように思います。行事の精選が唱えられても運動会がなくなることはないでしょう。それは、子どもたちの運動を大人が見守ることで成長を共に喜び合い、子どもも行事を通して挑戦し、達成感をもち、一つ大きくなる節目になるからです。ブルーナーが『教育という文化』[注1]の中で「文化はそれ自身、人間の作り出したものではあるが、それは人間の心独自の働きを形作るとともに、その可能性を生

み出していく」（p. 4）と述べているように、運動会という文化的行事は、大人にも子どもたちにも発達の可能性をつくり出していく一つの大きな出来事です。「集合的作品は集団の連帯意識を生み出し、保持させる」（p. 29）、「教育システムとは、文化の中で成長する子どもたちが、その文化の中にアイデンティティを見出すのを助けるものでなければならない」（p. 55）というように、運動会は園の一員というアイデンティティや、私たちの園、私のクラスという絆をより強めていくと思われます。

私は、文化的な行事のよさの一つは、一つの目的に向かって行われているように見えながら、そこに非日常からくる多層的な意味が生まれていくところにあると感じています。

運動会が子どもの発達の質の変化となる期の節目になり、さまざまな育ちの姿が見えてきます。寺川智祐先生からうかがった、以下のお話[注2]が心に残っています。

「チハルさんは三歳の時のかけっこで一等賞でした。そして四歳になって転園した幼稚園でもまたかけっこで一等賞でした。チハルさんの母親が保育者に語ります。『年少組のかけっこも一等賞を取って、その時はぴょんぴょんはねて本当にうれしそうでしたが、今年は家に帰るなりこんな絵を描いて、年少の時のように喜びませんでした』。チハルさんが描いた絵は三人の子どものうち、一等賞になった私は大きく万歳をしています。けれどもその脇で、一緒に走ったゆきちゃんとみきちゃんは、肩を落としてまゆがハの字に表され、私よりも大きさも小さく描かれていました。自分のうれしさだけではなく、その一人の万歳が、実はいつも遊んでいる仲良しの友達の残念を生み出していることに気づいたこ

とに母親はチハルちゃんの成長を読み取っているのでした」

「うちの子、こんなことができるようになった、前より速くなった」「ほかの子よりできている」というような、身体の伸びや運動能力の発達の喜びではなく、出来事を通しての人と人との葛藤への気づきや落胆もまた、誰もが真剣に取り組む活動だからこそ子どもの中に生まれていき、それがまた発達の次へのバネになるのだと思われます。

2　運動会の準備と片付け

運動会の目的は、活動への挑戦や運動への楽しみを育てることとして一般には語られるでしょう。しかし「みんなのくらし、公共の場での振る舞い」という視点を生み出す一つの転機でもあります。運動会ではさまざまな大きな道具等もしばしば使われます。プログラムを行うための道具の出し入れをみんなで共同ですること、つまり協力し合って物を運んだり片付けたりすることが進行のために必要であることを実感します。運動会は一度きりではなく、その前に練習が繰り返されます。その中で子どもたちは共同の大きな物を協力して片付ける所作も、文化的活動の中に埋め込まれ自然に学んでいきます。

私は、保育における片付けの研究に、共同研究プロジェクトでこの四年間ずっと取り組んでいます。子どもの片付けは保育の中で一年を通していかに発達し、どのように保育者に支援されるのかをビデオや面接で考え検討してきました。そして、自分の物を自分で片付ける、友達の物も一緒に片付けてあげる、という年度前半の育ちから、みんなの物をみ

んなで協力し片付ける、という意識への変化が、特に運動会の中で育てられるのではないか、という議論がなされました。もちろんそれは各園の保育文化により違うことでしょう。片付けだけではなく、列になって歩くことの必然性も大勢で限られたスペースを使う時だからこそ運動会の中では指導され、子どもの中に芽生えます。指導が過度になれば、軍隊の行進のようになってしまいます。「子どもの笑顔が消える指導はしないで」と私は練習を見せてもらう時にはお話しします。その子らしい動きの中で、しかし行事だからこそ文化的所作や身のこなしを学び、みんなの中での私の役割、私の独自性を見出していくのではないでしょうか。それが、ブルーナーのいう「文化の中にアイデンティティを見出す」行為の一つの現れではないかと思います。各園で保育文化を受け継ぎながら、新たな文化の創り手に保育者と子どもたち、そして保護者がなっていくこと、この営みが一つひとつのくらしや行事の中でどのようになされているのかを改めて確認し合うのが、行事の振り返りの時なのではないでしょうか。

（東京大学大学院教授）

注

1　J・S・ブルーナー著　岡本夏木・池上貴美子・岡村佳子訳『教育という文化』岩波書店　二〇〇四年

2　寺川智祐　「まことの保育に生かそう　教育の理念」平成二十二年春季真宗保育連盟講演資料　二〇一〇年参照